
ふたりだけの卒業式

忍者ムラサキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふたりだけの卒業式

【Zコード】

Z8525Z

【作者名】

忍者ムラサキ

【あらすじ】

「バクマン。」の一次創作。福田真太のコンビーバイト時代。夢小説。自ブログとmixiに掲載済。

「なつ、なんで。なんでこんなに部屋がキレイなの」
家に来たゴミちゃんが驚いてた。

「なんでって、掃除したからだよ。あたしだって掃除くらいするんだから」

「そうかな。しないと思つてたけどな。あ、なくしてたボタン出てきたりしたんだ」

ゴミちゃんがテーブルの上有る小さな透明なボタンを見て言った。

「それ触らないでね。大事な人のだから」

「彼氏の」

「違うけど、大事な人のだから」

「ふうん」

片付けられない女とはあたしのことだ。人間、掃除なんかしなくても生きてける。坂口安吾^{坂口安吾}だつて床が見えない部屋にいながら、立派に小説を書いたじやないか。部屋のキレイ汚いは人間の価値とは無関係だ。

だからウチは散らかってる。掃除をしようと思つたら、まず掃除機に積もつたホコリを取らないといけない。ゴミの日に起きれなくて出せなかつたゴミ袋もたくさんある。流しには洗つてない食器の山。

自炊するには洗い物をしないといけないけど、めんどうだからコンビニのお弁当で済ませることにした。

利用してるコンビニは最低だ。コンビニ全体としてはいいんだけど、この、早朝の時間帯のバイトの子が最低だ。あいつ、よくお弁当に箸付け忘れるんだよ。1回家に帰つて気付いたら、その度にコンビニまで箸を取りに戻らなくちゃいけない。買ったお弁当とレシ

ートを持つて。その間に温めたお弁当は冷める。でも箸を洗うなんてしたくない。

今日も例の「」とく福田くんだった。福田くんってのは最低のバイトの子の名前だ。もつ名前も覚えた。

箸の件さえなければ、福田くんは実はとつてもいい。白に近い銀髪で、スリムで、人を射抜くような三白眼をしてる。//コージーシャンみたいでかっこいい。たぶんバンドか何かやつてるんだと思う。でもあたしのいちばん好きなのは、福田くんの指だ。お釣りをもうらつときに気付いた。細くて、長くて、それでいて関節がしつかり出てて、男の人の指つて感じがした。そのくせ、指使いがしなやかだ。アーモンドみたいな爪の形もキレイだと思う。長丸くて、付け根より先端が細い形。まあアーモンドほど先は尖ってないけど。

まあ、正直に言つと、好きだ。箸を付け忘れるのをわかつてながら、いつもこの時間帯に利用してるのはそのせいだ。だつて会いたいんだもの。

そして、福田くんは今日もやつてくれた。家に帰つて袋を開けたら、箸が入つてなかつた。あたしはコンビニに戻つた。

「いつも、すみません」

福田くんは箸を袋に入れながらそう言つた。いつも、つて言つた。そんなことを言われるのは初めてだつた。毎回ただすみませんつて謝るだけだつたから。

「いつもしてるつて気付いてたんですか。覚えてたんですか。それなのになんでお弁当には箸つて忘れるんですか」

気付いたらあたしはけつこうキツイ感じで返してた。

「すみません」

「いいです。ちょっとあたしの言い方キツかったです。こちら//もすみません。お弁当には箸、それ覚えてくれたらしいです。また、来ます」

「今度。今度は忘れません。もつ忘れません。もし忘れたら俺は家まで届けます」

「ほんとうですね。約束ですよ。忘れたらほんとうに殴られやがりますから」

まさかその言葉がほんとうになるなんて思つてなかつた。

それからしばらくなちゃんと箸が入つてたんだけど、ある日福田くんはついにやらかした。

「箸、入つてなかつたんですけど」

約束してたから、あたしはコンビニに電話した。電話番号はレシートに書いてあつた。出たのは福田くんだつた。

「前に家に届けてくれるつて言つてましたよね。待つてます。届けてください」

「すみません。でも家がわかりません。やつぱり取りに来てください」

「ダメです。約束したんです。来てください。住所言います」

こんなこと言つなんてクレーマーみたいだなつて思つた。でも約束だ。それにもうコンビニまで戻るのもめんどりだ。あと、正直に言つ。会いたい。コンビニじゃないところで会いたい。

「わかりました。その住所で間違いないんですね。すぐ、届けます。待つてください」

少ししたら、ほんとうに福田くんが來た。コンビニの制服に、ジーンズ姿で、ブーツをはいていた。福田くんの靴は初めて見た。

いいのか、つて思つた。いくら見た目がかっこいいと言つても、好きだとか思つても、それ以外なんにも知らない男の人に住所おしえて、ひとり暮らしの家まで来てもらうつて、それほんとうにいんだろうか。でももうしてしまつたことだ。何かあつてもあきらめるしかない。いい。好きだしい。

「すみませんでした」

「いいです。あたし」「ん、ムリ言つました。忙しいのにすみませんでした。箸、ください」

「あ」

一瞬の間の後、あたしも福田くんも気付いた。福田くんは手に何も持つてなかつた。

「箸、持つてくるの忘れました」

その言葉と共にあたしは切れた。

「この、クソ店員、何してんだ、何しに来た、いつもいつも箸付け忘れやがつて、あげくの果てには持つてくれるのも忘れたとか、ありえねーだろこの能ナシ」

「は。お前何クソ店員とか言つてんだこのバカ。箸ぐれ一家にあんだろーが。そんなことでこいつち家に呼びやがつてふざけんなこのクソ女」

福田くんも切れた。こいつ客商売のクセしてなんつー態度を取るんだ。信じられない。

「箸はあるよ」

「じゃーそれ使えばいいじゃねーか

「あるけど洗つてない

「洗え」

「洗うのめんどくせー」

「つ、たく、じゃー俺が洗つてやるよ、それでいいだろーが」

あたしの返事も聞かず、福田くんはブーツを脱いだ。そして流しの前に立つた。

「ここだな。この汚ねー食器の山ん中にあらんんだな。ビーなつてん

だこの洗い物の山は。お前最悪だぞ」

「あるよ。どこかにあるよ。箸を見つけて洗つて。それ終わったらそこにあるヤツ全部洗つて」

「は。なんで俺がそんなことしねーとなんねーんだ。俺は家政婦じやねーんだぞ」

「箸忘れたお詫びに全部洗つて。そうしないと本部に連絡する。この店舗の福田って店員が最悪ですクビにしてくださいって言つ」

「信じらんねー」と考へんなお前は。いー。わかった。全部洗う。本部にチクんのはやめろ。クビにはなりたくねー」

箸だけ先に洗つてもらつて、あたしはそれでお弁当を食べた。食べてゐる間、洗い物をしてる福田くんを見てた。

「最悪だ、なんだこのぬるつきは。ギャー、カビ。今度は「ゴゲ。取れるかこんなモン、タワシビニだ、あーあつた。クソ。信じらんねー。なんなんだ、なんでこんなことになつてんだ俺は」

なんかブツブツブツブツ言つてゐる。

お弁当を少し食べた時点であたしは反省してた。ないな、つて思つた。知らない男の人に洗い物させるつて、あたしはどんなだけ失礼なことをしてゐるんだ。さつきはお腹が空いてたんだ。だからちよつとイライラしてたんだ。

「オラ、終わつたぞ。ビーだ、キレーになつたるーが

「はい。ありがとうございました」

「もーちょっとキレーにしとけ」

「はい。すみませんでした」

「なんだ、ビーした、さつきの威勢はどこ行つた」

「すみません、でした。イライラしてました」

ひたすら謝るしかなかつた。それでも許してくれるかどうかわからなかつた。何かお詫びをしないといけない。

「こつち。流しじやなくて、部屋の方来ませんか。お茶、飲んでつてくれませんか」

「お茶飲んだらまた洗い物が出んだるーが

「冷蔵庫にペットボトルがあります。それ、飲んでください。そしたら洗い物出ませんから」

「そーか。そーだな。俺も疲れた。お茶をもらつ

福田くんは冷蔵庫を開け、お茶を取り出し、床にあるものを踏まないよう気を付けながらあたしの傍まで来て、向かいに座つた。「流しも汚ねーけど、床もそーとーだな。何がビーなつてここまでなつたんだ。失恋か。失恋でもしたのか」

「そんなものしてないです。あたしはただ掃除がキレイなだけです」

「いやいやいや、待て、キライも何も程度つづーモンがあんだろー

が。こんなモン人の狂氣だ。お前は異常者だぞ

「だいじょうぶです。あたしは正常です。掃除なんかしなくても死にません」

あたしはお弁当を食べてる。福田くんはその向かいに座ってお茶を飲んでる。あれ、って思った。好きな人と部屋でふたりきりでお弁当を食べながら、相手はお茶を飲んで、お話してる。これは何。この嬉しい展開は何。

「福田くんはバンドをやつてるんですか」

「この際だからいろいろ聞いてみることにした。

「やつてねーな」

「じゃあひとりで音楽作ってるんですね

「作つてねーな」

「じゃあその髪型はなんなんですか。何してるんですか

「自由業だ。兼フリーターだ」

「音楽以外思い付かないんですけど。なんですか

「それは言えねーな」

「じゃあ本部に連絡」「

「待て、それはやめろバカ。わかつた言つ。言つから本部はやめろ。マンガだ。マンガを描いている」

「うそだ。そんな格好のマンガ家いるわけないじゃないですか。ベレー帽かぶつてないじゃないですか」

「お前のマンガ家のファッショントリビュートは止まつてんだよ。描いてるモンは描いてんだ」

「証拠は

「は。証拠なんてねーよ。この状況で何をビーやつて証明しちつ

「んだ。俺の家ならまだしも」

福田くんは考へ込んでた。

そして、ペットボトルを床に置き、あたしに手を見せた。

「指。右手の中指の爪の横。ホラ、ここな、ポコッて出でんだろ。これペンドラコつて言うんだ。いつもペンドラコつて持つてるからな、こーな

る

「そんなのあたしにもありますけど。勉強したら自然にそつなりますけど」

あたしも福田くんに手を見せた。でも、比べてわかつた。

「大きさ、違いますね。福田くんのほうが大きいですね」

「だろ。信じろ。俺はマンガ家だ。そんなに描いてねーけど。だからコンビニでバイトしてる。ちゃんと描けるよーになるまでこの生活続けるつもりだ」

「はい。信じます」

信じるけど、なんでマンガ家なのにこんな格好なんだろう。おかしくないか。マンガ家なのにかっこよすぎないか。

「福田くん指がキレイですよね。あたし見る度そう思つてました。爪の形がアーモンドみたいって」

「そーか、そーなのか」

「うん。纖細な感じがします。きっと描いてるマンガも、人の心を細かく切なく美しく描写する恋愛の話だつたりしませんか」

「は。んなモン描くわけねーだろーが。今描いてんのはヤンキーのバトルマンガだな」

「え」

なんだ。なんでこの格好でそんなものを描いてるんだ。おかしくないか。

いやでもさつきの切れ方じや、ヤンキーのバトルマンガもありだな。そうだ、それだ、ヤツはこっちだ。

それから福田くんが帰るまで、あたしたちはいろんな話をした。

福田くんの名前は真太つていうこと、今は新妻エイジつて人のアシスタントをしてること、ジャンプで連載するのを目指してること、担当が雄一郎つていうアフロの人なこと、好きなマンガは『とらぶる』つてこと、好きな食べ物がとんこつラーメンだつてこと、バイクが好きだつてこと、広島出身だつてこと、誕生日が1990年7月27日だつてこと、血液型はB型だつてこと、身長が179セン

チだつてこと、体重は66キロだつてこと、ジーンズのサイズは27インチだつてこと、普段は白いニット帽をかぶつてゐること、ヘブンアンダーグラウンドの財布を使つてゐること、チーンは短いから長いドクロのに付け替えたこと、シャンプレーはダヴだつてこと、ボケノートやつてゐること、好きな音階はファで、好きなひらがなはぬで、好きなカタカナはヲで、好きなアルファベットはQで、好きなじゅんけんの手はチヨキだつてこと。

それから、今、彼女はいなつてこと。

完全に、好きになつてた。

福田くんは何度も何度も箸を入れ忘れた。その度にあたしの家に来た。家に来て、お茶を飲んで、お話しして、帰つた。もう洗い物はしなかつた。

最初に家に来たときに、何かあつてもあきらめるしかないなんて思つたけど、なんにもなかつた。バイトが終わつてから家に押し掛けてくるとか、キスされるとか、やられるとか、そういうのはなんにもなかつた。悲しいことになかつた。

ある日また福田くんが来た。

「箸、持つてきた」

「うん」

そして、部屋には上がらず、玄関でこいつをついた。

「今日で最後だな、この家来んのも。俺、今日でバイト終わりなんだ。連載決まつたから、バイト辞めることにした」

突然の言葉に、足元からガラガラと崩れ落ちてくよつた気がした。

「辞め、なくとも、いい、んじやないの」

あたしの言葉は途切れ、上手に伝えることができなくなつてた。「ムリだ。1週間で19ページ描くんだぞ。時間足りねーんだ。アシスタントも呼ばねーと原稿仕上げらんねーんだ。バイトなんかしてるヒマはねー」

「あたしの、箸は、どう、するの」

我ながらわけのわからないことを言つてゐると思つた。同時に、福田くんとあたしのつながりはそれだけだつたつてわかつた。

「箸は他のバイトが持つて来てくれるんだ。いや、そもそもそれはねー。ちゃんと付けてくれるはずだ。俺よりやれてるよ、みんな、たぶん」

「連載は、いつ、終わるの。バイト、再開、する日は、いつ」

「お前何言つてんだ。終わる日なんて来ねーよ。もうバイトもしねーよ。ゼッテー終わらせねー。長く、長く、ずっと長く続く。俺はそーしてーつて思つてゐる。だからそーなる。そーなるよーがんばるんだよ」

強い言葉だつた。言葉だけじゃなく、田の中にも必ずそうしてみせるつていう気持ちが宿つてた。

福田くんはあたしをおいてどこかへ行つてしまつ。マンガ家つていうあたしとなんのつながりもない世界へ行つてしまつ。あたしはひとりここに取り残されて、追つこともできず、福田くんへの気持ちを抱えながら毎日毎日生活を続けるだけだ。変わつてくのは、やりたいことを実現させた福田くんと、何も変わらないあたしの距離がどんどんどんどん離れてくつてことだけだ。

家なんてわからぬ。電話番号も知らない。メールアドレスも知らない。いろんなことを聞いた。でもそういうプライベートな時間へつながる情報をあたしは聞き出せなかつた。

何も言つことができず、あたしはただ首を横に振つた。

「わかれ

福田くんは切なげに田を細めて、強い口調でそう言つて、唇を噛んだ。

「わかるよな。俺がやりたかったことはコンビニの店員じゃねーつて。マンガ、連載してーつて。人気作家になりてーつて、そー言つたよな俺。そーいうこと全部お前に話したよな。全部、わかつてくれてると思ってた

「それは、聞いた。そう、なつたら、いい、つて思つてた。ただ、

会えなくなる、つてのは、考えて、なかつた。そう、なりたく、ない」

「そーだな。俺もここ來たとき楽しかつたな。そーいうのなくなると思つと、ちよつと、さみしーよな」

言つて福田くんはあたしに背を向けた。

「さよなら」

なんにもなかつた。キスされるとか、やられるとか、そういうのはなんにもなかつた。あたしと福田くんの間にはなんにもなかつた。

「行つちや、やだ」

背を向けた福田くんに、あたしはしがみついてた。折れそうなほど細い腰に手を回し、大きくて堅い背中に顔を押し付けた。肩甲骨があたしの顔に当たつて痛かつた。でも、その痛みすら、あたしにとつては大切なもので、手放したくない大切なもので、福田くんがあたしに与えてくれた大切なもので、だからもう一度チカラを込めて抱いた。

「少し、話を、聞いて」

「うん」

考えた。考えた。考えた。じついう気持ちをどう伝えていいのかを考えた。でもどう考えてもたつたひとつつの言葉しか出てこなかつた。だからそのまま伝えることにした。それしかなかつた。

「好き」

「うん」

福田くんはただそう返事をした。背中を抱いてるあたしには、福田くんの顔は見えなかつた。

「福田くんは、あたしのこと、どう、思つ」

「そーいう風には考えてなかつた」

「そつか」

「でも、キレイではないな。ただ、考えてなかつただけだ。悪かつた」

その言葉があたしと福田くんの間に壁を作つた。でも、そのまま

でいるのはもうイヤだつた。乗り越えなければならぬ。

「お別れに、キス、して、ほしい」

「できない」

「1回でいい、それだけで、いい」

「できない」

「理由は。どうして。前に彼女はいなつて言つた。なんで、なんでダメなの」

「理由は、ない。俺にはできない。ただそれだけだ。もし、そういう男が好きなら、お前はそれを好きになれ。俺のことはキレイになつていーから」

ハツキリ拒絶されてわかつた。福田くんはそういう人じゃないつて。好きでもない女の子にキスするよつな人じやないつて。だからもうこれ以上言えなつて。言つたら福田くんの心を壊す。そして、キレイになんかなれないこともわかつた。もうキスなんてどうでもよかつた。福田くんの気持ちを大切にしたかつた。そして、あたしの気持ちも。

「このままどうすればいいのかわからなかつた。何か、何かしなければいけない。そうしなければ終わつてしまつ。

「じゃつ、じゃあ、その制服の、第2ボタンをちよつだい」

「は」

福田くんも驚いてたけど、あたし自身もそつだつた。何わけのわからぬことを言つてるんだつて思つた。

「それはあれだろ、学生服の場合じゃねーのか。なんだそれ。コンビニの制服でそれはねーだる」

「いい、もう、それでいい、なんでもいい、とにかくあればいい。ああ、でも店長さんとかに怒られるかな、ボタンどこやつた、弁償しきつて」

「いや、それはねーけど、たぶんねーけど、いーのかそんなモノで。やつぱりお前は異常者じやねーのか」

「だからあたしは正常だつてば」

あたしは福田くんの腰に回した手を離した。

そうして部屋に行き、床の物をひっくり返しながらハサミを探した。それは意外とすぐに出てきた。

玄関に戻つて、福田くんにハサミを手渡す。

「福田くんが切つて」

「うん」

やりにくそうにしてたけど、3回動かしてなんとか切れた。あんまり切れるハサミじやなかつたのかもしれない。

「ホラ」

ボタンが福田くんの手から、あたしの手のひらの上に渡つた。ついでにハサミも返つてきた。

「なんだこれ。何してんだ俺は」

「卒業式みたいだよね」

「ねーよ。そんな卒業式どこのあんだよ。この格好で行つたら家帰されるわ」

「コンビニの店員の卒業式つてことでいいんじゃないの」

「んなモンねーよ。じゅーお前もなんかしろ。あれだ。部屋を片付ける。片付けられない女の卒業式をしろ。それで対等だ」

「別に競つてたことはなかつたけど」

「いーからやれ。これで部屋が片付かなかつたら俺とお前のバトルはお前の負けだ」

「いや、だから、別に競つてたことはなかつたけど」

さすがヤンキーのバトルマンガを描く人だ。何この発想。基本勝ち負けかよ。

「わかった。掃除する」

「そーだ、そのとーりにしる。あとな、あれだ、こーやつて付き合つてもねー男を部屋に入れるな。まー、お前は俺のことが好きだつたつづーから、それはアリにしどぐ。でも他の男は入れるな。何するかわからんねーヤツもいるから。それは約束し」

「うん。わかった。約束する」

「じゃあ、これで。元氣でいろよ

「福田くんもマンガがんばってね」

「ジャンプ、チェックしどけ。福田真太でそのまま載るから」

「わかつた」

「じゃーな」

「さよなら」

福田くんは静かにドアを閉めて出てつた。

さようなら。元氣でね。マンガがんばってね。人氣作家になつてね。あたしのことは忘れないでね。あたしも忘れないからそうしてね。部屋は片付けます。付き合つてもない男を部屋に入れません。ジャンプをチェックします。

もし今度会えたら、キレイになつた部屋を見せられるといいな。付き合つてもない男を部屋に入れないつていつ約束だから、そのときは彼氏になつて部屋に来てね。もう散らかさない。いつ福田くんが来てもいいようにしとく。

あたしは手のひらの小さな透明なボタンを見つめながらそう思つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8525z/>

ふたりだけの卒業式

2011年12月26日22時56分発行